NEO
WOMAN

2

美容師として日本人の美を追求する

ヘアメイクアップアーティストフォトグラファー
（TICK-TOCK　代表）
SAYURI

取材・文／○○○○
撮影／○○○○

アンバランスな魅力で人を惹き込む、SAYURI。
美容師であり、ヘアメイクアーティストであり、
そして、写真家でもある彼女は今、
門外不出と言われる独自のカット技術を
世界に発信し続けている。
アジア女性を世界で一番美しい存在にするために—

美容師が使命だと言い、スタッフがいるから走り続けられると笑顔を見せるＳＡＹＵＲＩ。彼女はこの仕事を、仲間を、人を、本当に愛している。無償とも思えるような心で。

彼女は今年、門外不出と言われる独自のカット技術を世界に公開した。美容業界の概念や慣習を超える斬新なチャレンジ。そこには、「美容師として、もっともっと日本人の美しさを追求していかなければならない」という使命感と、「アジアの女性たちを世界で一番きれいにしたい」という強い想いがあった。多くの女性たちの心を解放し、より幸せな世界を拓くために、ＳＡＹＵＲＩはそのピュアな心で、強い眼差しで、まっすぐに歩み続けている—。

独自カット技術を世界に発信したのは
みんなにもっと美容を楽しんでもらいたかったから

日本の美容師たちへ、自信を持ちなさい。
日本の美容技術は、世界最高だと自負しなさい。
あなたはこんなにすばらしい職人なんだよ――

今年、そんな想いの詰まったSPIRITUAL ART PHOTO BOOK【FOR JAPANESE HAIRDRESSERS～日本の美容師たちへ】が日米仏で同時出版された。その著者こそが、美容師、ヘアメイクアーティスト、そして写真家でもあるSAYURIである。

海外を渡り歩き、街中でモデルになりそうな女性に声をかけヘアメイク&撮影をしたフォト作品、世界一の技術を持つ日本の美容師へのメッセージ…今までと異なる切り口から職人としての美容師の内面を描き出した。それは、美容師を使命として歩み

続けてきた彼女の想いの集合体であり、美容師を目指す人、壁にぶつかり美容師を止めようとしている人、美容室に通うすべての人たちへ贈る、愛のギフトである。

ＳＡＹＵＲＩは現在、神戸・姫路にヘアサロン「TICK-TOCK」を3店舗展開している。そんな彼女の代名詞とも言えるのが【ステップボーンカット】。同じスタイルにカットしても、骨格のきれいな西洋人と平面的な骨格を持つ東洋人では、僅かだが絶対的な違いが生まれる。その骨格の違いを矯正するためのカット技術の開発に取り組んだ彼女が、5年の歳月を経て誕生させた顔立体補正カットである。

そして今、彼女はその自らのノウハウを技術教育カリキュラムとしてシステム化し、美容業界、そして世界に、広めようとしている。独自の技術は門外不出、と言われる業界の慣

習を飛び越えて。

「技術を外に出すことで自分自身のスキルもあがります。それに、ステップボーンカットってすごくデザインの自由度の高い技術だから、その存在を通して、提供する側も、またされる側も、もっと美容を楽しもうよ、っていう想いがあったんですよね」

そこには、美容師を使命として走り続けてきたＳＡＹＵＲＩの強い想いがある。「美容師個々の技術が向上すれば、美容業界全体の価値が上がります。そうすれば、もっともっと人をきれいにしていくことができる。日本は欧米に比べて、素敵な大人の女性、の概念が弱い。だからこそ、まずは日本人を、ひいてはアジアの女性を世界で一番きれいな人種にしていきたい、そういう世界を作りたいんです」

従来の美容業界の概念を飛び越え、サロン同士で手をつなぎ、知識共有できる環境を作ること。そこで得られる相乗効果こそが、美容を楽しむ、ことに繋がっていくのだ。ＳＡＹＵＲＩは今、その想いを、拠点である神戸の街から発信し続けている。

自分が想い描くサロンをつくるため、25歳で独立。人間力の不足と器の限界を思い知らされ、30歳でNYへ

「絵を描くのが好きで、漫画家になりたいな、と思っていたんです。出版社とかにもいろいろ投稿したりしていて…だから美容師になりたくて、という強い想いがあったわけではないんですよね。なんとなく(笑)。なんとなく美容師もいいかな、と」

夢のある話じゃなくてごめんなさい、そう言って笑う。とはいえ、思春期のころから、美容師への道に誘われる予兆はあった。彼女は「頭の形と髪質が悪いから」どのサロンでも思うようなヘアスタイルに仕上げてもらえなかったという。

「思うようにならないなら自分で切ればいいんだ」

もともと手先が器用だったこともあり、いつしか彼女は自らの手でカットをするようになっていく。そして、自然とその歩みは美容師という道に向けられていった。

最初に勤めたサロンはとても厳しかった。しかし、24歳のとき、家の都合で実家に戻ったのを機に働きはじめた地元のお店は、まるで真逆の状態。

「厳しいのは嫌だったのに、今度はいい加減な感じがすごく嫌で(笑)。それまでなかったミーティングやトレーニングをはじめたんです。でも、売上が上がってくるといい気になり、どんどん勝手にやってしまい、当然オーナーとぎくしゃくしてきて…」

結局、1年ほどでお店を離れるも、勤めた店がなく、25歳のときに独立を決断。大きな借金をしてオープンするも、来てくれるお客さまは親類縁者、友人ばかり。2〜3日も経つと客足が途絶え、手描きのチラシを作りハンティングに奔走する。

「バスとか電車で隣り合った人にも『あなたにはもっと似合うスタイルがあるので私に任せてください』と声をかけてチラシを渡してましたね(笑)」

積み重ねた努力はカタチとなって表れていくものの、その心と体は限界を超えようとしていた。売上の8割を一人で生み出している状態。自分自身はどんどんボロボロになり、スタッフとも意思疎通が図れない。

「自分の器に限界を感じていました。教えてもらえる環境にいた時間が短かったから何も知らないまま一国の主になってしまい…自信のなさと独立後の余裕のなさが重なってバランスが崩れていくのを感じました」

お店のなかだけで過ごしていたから世間を知らなかった、と当時を振り返る。そこに拍車をかけるように、心身の疲労が思考をマイナスへと引っ張っていく。

「あのころの私には人を思いやる心も余裕もなかったんですよね。自分自身がしんどいこともあって、スタッフにあたったことも。完全に人間力の不足であり自分の器に問題があるってこと。そんな自分が嫌で、変えたくて、NYへ行くことにしたんです」

自分を鍛えてみたい。それ以上に、単に尊敬される人間になりたかった。アメリカでサロンワークをすればそうなれるんじゃないか？ 独立から5年後、彼女は悶々とした心と未来への希望、を胸に抱えて日本を後にした。

スタッフがいてくれる限り、走り続けられる。自我を出さず、個々の才能を活かせる環境づくりを

ＮＹで過ごした3ヶ月は、ＳＡＹＵＲＩにとって、未知であり、夢の日々だった。渡米後1〜2週間は働けるサロンを見つけるために奔走する。ようやく見つけたのは、現地の俳優やモデルを顧客に持ち、雑誌『ブルータス』の表紙を飾ったこともあるグリニッジヴィレッジのサロン。そこでの2ヶ月半を通して、日本との違いを感じていく。

「スタッフ1人1人が独立していて、プロの美容師としての自信とプライド、責任をしっかり持ってやっていました。何より、すごく楽しそうで…。それを見て、自分のお店は全然違う、みんな辛そうだったなって。当の私自身がすごく辛かったしね」

そんなＮＹでの毎日は、すべてが刺激的で楽しかった。苦しかった経営者としての束縛から離れ、嫌いだった自分自身が好きにもなっていた。

「店舗が空いているので〝やらないか？〟と声をかけてもらったんです。本心としては喉から手が出るくらいその話に乗りたかったけど、日本のサロンをスタッフに任し

っきりにできるほど経営組織が整っていなかったので、NYに留まるわけにはいかず、2店舗目のオープンに合わせて帰国しました」

しかし、日本に戻ったSAYURIを激しい虚無感が襲う。NYが見せた夢は、いつまで経っても醒めることがなく、現実とのバランスに苦しんだという。時を同じくして彼女は、サロンを、当時の日本では珍しい完全コミッション方式に変更する

「当時の私は経営に目覚める前。経営というものが何なのかがわかっていなかったんです。人を雇用する、ということが向いていないな、と。だから、コミッション方式（＝個人事業主方式）で採用してからは楽しかったですね」

気持ち的に楽になった本人と反比例するようにスタッフには不満がたまっていく。

「やりがいに飢えてくるんですよね。やりがいって人とのコミュニケーションだったり、仲間づくりだったりを通して感じていくもの…」

コミッション方式は自由だけどドライな関係だから日本人にはあまり向かない、と話す。もっといろんなことを学びたい、いろんな人と協力してやりたい、と向上心のあるスタッフが増えたことにより元の雇用形態へ。ただ、彼女ははじめて知った。

「人が愛情をほしがっている、なんて考えたこともなかった」

個人事業方式というドライな世界と、豊富なコミュニケーションの元に密に寄り添うウェットな世界、その両方の体験が見せた大きな気づき、であった。

「いろいろあったけど、今現在ついてきてくれているスタッフたちの期待に応えたい、応えられる自分になりたい、その想いが私の原動力。たくさんのことを学ばせてもらって、見えていなかった自分に気づかせてもらえるから、ちゃんと身を正そうって思える。だから、私からスタッフに求めることは何もないんです。そこにいてくれる限り、私は走り続けていられるから」

ＳＡＹＵＲＩは、20代を全力で駆け抜けてきた。そして、30代、40代、と新たな世代を迎えるたびに、確かな学びを胸に生きてきた。そして今、あらためて思う。

「20代のころって、やりたいことに対してまだ自分の努力がついていかないとき。その隙間を埋めるには、考えるよりとにかくがむしゃらに体を動かすしかないと思います。そうして迎えた30代では、少し余裕が出てきて人を許せるようになってくる。40代になると、周りの力や可能性を上手に活かせるようになるんです。そして今は、周

りの人の方が私より全然優れてると思うから、逆にみんなは大変だなって(笑)。今はもう、周りの人たちに対して感謝の気持ちしかないですよね」

彼女は人に対して、いつも感謝を孕んだ敬意を持って接している。

「私にとっての尊敬って、この人のここはすごいなっていう気持ちの集合体」

この言葉に、他力本願、という言葉が好きだという彼女の真意が見えた気がした。

「好きな言葉でもあり、目標としている姿なんですけど…できる限り自我を出さないで人の力を活かしていく、という意味。人にはそれぞれに素晴らしい才能があるから、それを邪魔するようなことはしたくない。自我を出すと邪魔なことがたくさん出てくるからね。そうすれば、

不満も出なくなるし、お互いが喜べる環境をつくれる」

自分ですべてを行うのではなく、周りの人たちの力をしっかり活かすことで相乗効果を得ていく。それは、人のやる気の腰を折らない、ということでもあるのだ。

思い通りにならない＝なくてもともと。そう思えたら、いろんなことに振り回されなくなる

ＳＡＹＵＲＩは過不足がない。物事の本質のなかにいる、と言えばいいのだろうか。「常に〝ゼロの状態〟にいるとは思いますね。プラスでもマイナスでもなくゼロ。いろいろ考えたって、思い通りになんてなるもんじゃない。つまり、なくてもともと＝ゼロ。そう思ったら楽だし、いろんなことに振り回されずにいられます。そこからプラスに振れれば感謝の心が、マイナスに振れれば反省の心も出てきますからね」

だからだろう。彼女の空気がひどく澄んでいるのは。感情に支配されない、ある種、

無の状態。それが、過不足がない理由なのかもしれない。

「なんでも、〝過ぎる〟のはよくないと思いますね。テンションも、上がり過ぎるのも下がり過ぎるのもよくない。もちろん、食べ過ぎたり、飲み過ぎたりも。なんでも〝過ぎる〟と、最後は自分に返ってくるから、〝過ぎない〟ように調整することは大事」

重心がしっかりしてさえいれば、過ぎる、ことはない。そしてその重心を、ゼロの場所に置いておけば、そこから過剰にずれてしまうこともない、と。

常に過不足がないゼロの状態にいるからこそ、周りに翻弄されることもないのだ。

「30歳くらいのころは、周りに何か言われると怯んでましたよ(笑)。でも、アメリカに行って、考え方はいろいろ、ひとつの考え方がすべてじゃないんだなって。海外に出ればすべてが違うし、同じである必要なんてないんです。人と同じじゃないと、話を合わさないとって思っていたこともあったけど… そういう体験を通して、まったく気にならなくなって、自分がやりたくないことはしなくなりました(笑)」

それを我侭だと言う人もいるだろう。でも、潔く我侭であれることは、それだけ強い信念と覚悟がないとできないことではないだろうか。

「人のことを気にしなくなれると、人生はずっと楽になりますよ」

そう言って清々しく笑う彼女は、自分をちゃんと生きている。たとえ、周りからどう思われても、自分の心の声にしっかり耳を傾け、それをきちんと言葉にしながら。

「日本って大きなことを言うと笑われたりするじゃないですか？ でも、謙虚にならずに、もっと自信を持って、もっと『こうしたい！』って言っていい。伝えることは大事なことだと思うし…それによって自然と自分自身も動いているんですよ」

強く描かれた未来のもとに放たれる想いは、人の心を動かす。それは、自身のエネルギーとなって、強情な足を踏み出させてくれるだろう。ただそれが、世の中や人の

ためにつながっているかどうか、は大事だと話す。

「やっぱり人間って、ピュアなものに心を動かされるものだから」

だから、彼女の思考や眼差しは、迷うことなくピュアで在り続けられるのだ。

アジアの女性たちを世界で一番きれいにしたい。そして、誰かの夢や希望を叶えられる人でありたい

「自分自身に〝規制〟を作っている女性って多いですよね。でも、人って自分がしたいように生きてるんです。自分で壁や殻を作ってるってことは、そういう人生を生きたいってこと。そうじゃないんだとしたら、ちゃんと自分で決めた方がいい。制約のあるなかで生きていたいのか、制約のないなかで生きていたいのか、どういう自分になりたいのか。を。それが描けたらなら、一時でもいいから壁や殻を捨ててみてほしいんですよね。1年でも半年でもいいから『自分の好きにさせてほしい』って。本気

で伝えたら周りだってちゃんと認めてくれるはず」

そこには、美容師を使命として歩み続けてきたからこその、強い願いがある。

「美容師という一芸を通して、世界に発信していける、誰かの夢や希望を叶えられる人でありたい」

ココ・シャネルやヴィダル・サスーンのように、抱えている〝制約〟から女性を解放してあげたい。ＳＡＹＵＲＩはそう願っている。

「美容師というのは人をきれいにできる仕事です。それによって、その人が幸せな気持ちになれば、自然とその人の周りも幸せになっていく。アジアの女性を世界で一番きれいにしていくことで、もっともっとＨａｐｐｙを増やしていきたいですね」

美容師として日本人の美しさを追求し、一人でも多くの女性を輝かせるために。ＳＡＹＵＲＩは歩み続けていくだろう。まっすぐで、真っ白な、眼差しをもって――。

パーソナル　プロフィール

氏　　名	SAYURI
肩　　書	TICK-TOCK 代表／ HAIR MAKE UP ARTIST ／ PHOTOGRAPHER
経　　歴	1985年「TICK-TOCK　Curb」オープン後、独特で幻想的な世界観を表現するヘアメイクや、音と写真と共にストーリーを展開する写真が、SAYURI　WORLDと評されるようになり、業界を牽引するカリスマ的存在となる。2010年、ART BOOK 『FOR JAPANESE HAIR DRESSERS - 日本の美容師たちへ -』を日仏米同時出版。グローバルな視点から見た日本人美容師の技術と、日本のココロのすばらしさを エコ&スピリチャルな写真と散文で表現し、話題となっている。
著　　書	FOR JAPANESE HAIR DRESSERS

カンパニー　プロフィール

社　　名	TICK-TOCK
住　　所	〒000-0000　兵庫県姫路市●●（本社）
T E L	●●●●●●●●●●●●
H　　P	http://www.tick-tock.co.jp/
ブ ロ グ	http://ameblo.jp/sayuri1203/
メ ー ル	●●●●●●●●●●●●